

三河アララギ

平成二十七年

七月号

第六十二卷 第七号



ニューヨーク日記(105) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Gallow Green

Blue Shoe Diaries



やっと春? 来たかな? 天気の良い日曜日に素敵屋上The Gallow Greenでランチ! ちょみっとまだ寒いのを無視して。。ミモザを何杯か飲んだら寒いのが忘れた。見かけだけでなく食べ物も美味しかったよ～ あまりにも可愛いガーデンになっているからまた来たい! 夕方はカクテルバーに変身するらしい。

It looks like spring has arrived? I think? And with it comes the urge to be outdoors! So we went to a rooftop brunch at The Gallow Green. It's such a pretty rooftop garden setting! Sipping on lovely mimosas to pay no attention to the slight chilly air we had their popular cold fried chicken. It's like a picnic! I heard they transform into a nice bar in the evenings. Think we shall return for that during the summer!

目次

第六十二卷第七号(通卷七三九号)

表紙 ぶどうの木	今泉 由利 (1)
ニューヨーク日記(105)	Blue Shoe (2)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)
歌集「スモン」	大須賀寿恵 (5)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)
小夜更けて	岡本八千代 (7)
過去へ未来へ	今泉 由利 (8)
漢字百選	弓谷 久子 (9)
自由な時間	青木 玉枝 (10)
西瓜の編目	内藤 志げ (11)
ふる里の森	林 伊佐子 (12)
石巻山	安藤 和代 (13)
詠吟の	足立 晴代 (14)
バランス	鈴木 孝雄 (15)
小松菜	清澤 範子 (16)
ままならぬ	伊藤 忠男 (17)
皐月なれど	近藤 映子 (18)
木島神社	森岡 陽子 (19)
野の花よ	富岡 和子 (20)
古絵図	白井 信昭 (21)
赤福餅	半田うめ子 (22)
孫娘より	阿部 淑子 (22)
初夏	杉浦恵美子 (23)
隣家	平松 裕子 (24)
いもの蔓	山口千恵子 (25)
春はたけゆく	夏目 勝弘 (26)
時間	いーはとぶ (27)
ことよせ	(28)

私の二首

現代学生百人一首(二〇一四年)

『俳句』

牧原 正枝 (28)	岩瀬 信子 (28)	石田 文子 (28)	森 厚子 (28)	山崎 俊子 (28)	三田美奈子 (29)	水野 絹子 (29)	牧原 規恵 (29)	稲吉 友江 (29)	鈴木美耶子 (29)	吉見 幸子 (29)	遠藤 脩子 (30)	岡本八千代 (30)	森岡 陽子 (31)	夏目 勝弘 (31)	東洋大学 (32)	松本 周二 (34)	山元 正規 (34)	今泉 由利 (34)	川井 素山 (34)	小柳千美子 (35)	重野 善恵 (35)	田中 清秀 (35)	森岡 陽子 (35)	柳田 皓一 (36)	和田 勝信 (36)	米田 文彦 (36)
------------	------------	------------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

かさね吟行会

『酔いの徒然』(39)

ある自然科学者の手記(38)

絹の話(56)

短歌に詠まれた茂吉 四十六回

楽しい時間(32)

『楽しくマナー』①

『歴代天皇御製歌』(三十七)

挽歌 (三十八)

『水魚のことから(174)

ことのはスケッチ(439)

編集室だより(二〇一五年五月)

和菓子街道(105)

お知らせ・第三十三回 子規顕彰全国短歌大会・三河アララギ規定

小池 清司 (36)	植村 公女 (37)	正岡 子規 (37)	芭蕉 (37)	曾良 (37)	田中 清秀 (38)	山元 正規 (38)	丸山酔宵子 (40)	大橋 望彦 (42)	今泉 雅勝 (44)	鮫島 満 (46)	山本紀久雄 (48)	辻 照子 (50)	貫屋海屋資料館 (52)	夏目 勝弘 (54)	岡本八千代 (55)	今泉 由利 (56)	三河アララギ (58)	平松 温子 (59)	子規顕彰全国短歌大会 (60)
------------	------------	------------	---------	---------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	------------	-----------	--------------	------------	------------	------------	-------------	------------	-----------------

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集「御津磯夫歌集」

草の海に棹さすごとく青竹の枝の杖つきゆきて沙羅の木の花

P 180

裏庭のしげみになじまず夏椿沙羅はことしもただのふた花

P 181

歌集 「スモン」

大須賀 寿恵

挿木せし枝垂柳のなびきつつわがゐる二階の窓撫づるなり

浮び来し一つの言葉くり返し厨掃きゐるうちに忘れし

あじさゐのたわめる花のゆれをりて花より出づる小さきかな蛇

歌集 「草々」

今 泉 米 子

砂浜より採り来し枸杞の赤き実を花瓶の菊に挿し添へにけり
しまひ風呂洗ひてをれば声変りはじまりし吾子の英語読む声
五万分の一秒の空電図示し給ふ芝枯れし壕舎の研究室に
久能山の石階たかく従ひきフェルトの草履はきてゆきにき
階段の下より吾が子と呼ぶ夜更け二階は雨間の月明りせる
たどたと二日かかりて老い父が張りし障子の紙の匂へる
船積みの板打ちつけし梱包に十三やの櫛も入れたりといふ
筍の二節ばかり皮脱ぎし庭見めぐりて発ちてゆきたり
汝が父は船出の汝に朝露の庭に咲きたる海芋を剪りぬ
ゆきゆきてみ冬の国に着きにけむ夢あじさいに今日も雨の日

小夜更さけて

蒲郡 岡本八千代

小夜更けていたゞきし君の歌集ひらく題名「測深鉛」に男をのこ歌を感じず

拾ひたるひよんの実を妻の手におきし君ら夫婦めおとの歌の愛かなしさ

妻おもふ君のみ歌のわれに伝ふしみじみとするこの春の小夜

曾孫ひいを抱きたき心制へつつ老いの己の体のあはれ

抱きたくも抱いだく力のなき老いを感じるわれのさびしきあはれ

久しぶりに曾孫の泣き声聞く夜ようれしさもありさびしくもあり

自生えせし夕影草の葉みどりの今年も萌えつつそのやはらかさ

「氷魚ひお」の稿また今月も「ノボさん」を書いてやうやく心足らへり

いたゞきし「天平香」のほふかなひとりこもれるわれの書屋に

独りきりになられし君がたまひたる唐招提寺の天平香にほふ

過去へ未来へ

東京 今泉 由利

明後日満月となる定めにて少し足らざるまろみやさしい

もみまい
はぐく
粃米の二十四粒育まれひとりひとりの糧となるべし

マロニエの立房高々花咲けり心ゆききす過去へ未来へ

先達の描き残せし赤燈台同じ角度に私も今日は

身を寄する陰のなきまま真昼間の太陽のもとわが身を晒す

太陽の分身にして太陽のアレルギ―は身深くもてり

薄塩のひと干しいか口売る店のベンチに長く人を待ちをり

金星と四日の月と木星とま向ひ帰る我家への道

まだ青さ残れる空の四日月金星木星供なひてゐる

一つ夜を寄せては返す波の音聞こえてゐたり地球のリズム

漢字百選

豊川 弓 谷 久 子

御津山に住みゐる鳥か今年また間近く聞ゆる鶯の声

ジャスミンの花の香りが庭に満つ何は無くとも我は幸せ

子の庭に初めて生りしと豌豆の青き莢実のこのひとにぎり

紺の地に麻の葉模様リフォームの我がブラウスは縫ひ上がりたり

発売日子が憶えゐて知らぬ間に買ひ来て呉れし漢字百選

穏れゐる言葉を捜す楽しさに刻忘れをりナンバークロス

少しヒント超難問も何のその孤独な趣味よ漢字の遊び

住む人も無きこの家の軒先に今年もつばめは帰り来りぬ

朝夕に水を注ぎぬ咲き初めし我が紫陽花は隅田の花火

子の夏のパジャマ縫ひをり暑き日の続きてはやも水無月か

自由な時間

新城 青木玉枝

山里に住みて歲月流れゆく老いてむなしさ日々味はいて
残り世は安らぐ日々を送りたひされど都会のリズム恋しき
毎夜きめて星のきれいな空を見る物音一つなき静けさに
独居の部屋は誰にも気がねせずそれだけ私の自由な時間
一つづつ楽しみ作り残り世を幼におさな返り日びの生活たつきを
ペンを持ち木片は幾つ書けるかと嬉しや三十五文字すらすると
何よりもボケが一番恐ろしい九十三才短歌に励はげまされ
はなれ来て始めて身に沁む血縁にそむきて今更ゆる日々なり
嫁姑そんな言葉はわれに無く伊丹での生活たつき楽しき想い出
好きで出て今更帰るは言はれない施設は最後の住家すみかになるやら

西瓜の縞目

豊川 内藤 志げ

東の藪に片鳴く鶯の姿小さく初鳴きにして

花が散り牡丹の向ふに庚辛ばら一重の花の清しく見ゆる

さらさらと沙羅の薄葉をゆらす風何故暑き臯月一日

道に立ちわれは口のみ動かせて茄子と西瓜との定植終る

充分の湿りに植ゑし茄子南瓜根の張りよろし朝々眺む

中空に上弦の月清かなり暑き一日のカーテンを閉ず

杖を持ち坂道下るは久しぶり乾きし落葉を踏みしめながら

試足の道小草の中にちらちらとちらちら揺るる小判草ゆるる

台風は恵みの雨をもたらして庭に木の葉の一つ残さず

晴れ続き西瓜の縞目はくつきりと鳥の狙う玉となりたり

ふる里の森

岡崎 林伊佐子

若き日の棚田も今は森となりもりもりあお蛙の産卵をする

沼地にもりあお蛙の産卵が空木^{うずき}にたるるふる里の森

生きるとは想い出を積み捨てること聴覚うせたる長き歲月

体力に合せて山路を登り行くわらびも落も摘みて楽しむ

鶯の声に目覚めし若き日も今は懐かしふる里の山

妻としてまた母として祖母なれば成すこと多きわが世は過ぎむ

日焼けして節樽れ立つ手も健康に農仕事できる生甲斐がある

虫除けにスイカ畑に植えて行くマリーゴールドしるく匂へり

薬剤をまかぬ着想たてながら時代おくれの野菜を培う

草刈りて雉の卵を見つけたたりピンポン玉に似したる色は

石巻山

豊川 安藤 和代

孫達の喜ぶ顔が見たくって腰さすりつつ玉蜀黍蒔く

祖母吾にくれたる母の日のカーネーション嬉しく悲しくせつなき喜び
雨降れば石巻山も見えずしてはぐれ鳥急ぎ北へ去りゆく

雨上り弓張り山脈緑映え澄みし空気に命ふくらむ

座る度立つ度に言う「どっこいしょ」どう言う意味かと孫は問い来る

入選の孫の主張の文読めば吾の知らざる世界持ちをり

フリージアの切なく香る夜の夢は父に会いたし母に会いたし
水槽の金魚にやさしく声かける夫となりたり病みてひととせ

学校にも慣れて賑やか七色のランドセル行く葉桜の道

汁の実に茄子を浮かせば夏の香と夫は笑顔でおかわりを言う

詠吟の

東京 足立晴代

歳としを重ね振り返えり見る越こし方がたの歩みし道のはるかなるかな

短歌うたよ詠みて想いも新歳あらたとし数え残りし日々を如何に過さむ

詠吟の初めての声マイクより皆には如何に聞えたるかな

日の丸を背にして吟ずる吾姿学芸会を想い出しをり

薫風のさわやかなりや五月晴れかり込みすみし松涼しげにして

風炉釜になりて炭火も控えめに点前てまえも軽かろく夏を迎えむ

茶の道の深ふかきを知りて沁しみぐと趣おもむきながく続くよろこび

緑こ濃こき小なみ続き広々と苗代ありて豊かなるかな

さわやかな風流れゆき若緑光陰うけて強いき息吹いぶきを

騒さわがしき外国とつくによそに静かなる大和の誇る文化求めむ

バランス

沼津 鈴木孝雄

トマト苗植え付けてまだ十日なのに支柱の紐を一段上に

中国の研修生は連休なく朝から働く干物工場

春台風疾風のごとくやつて来てナス苗の葉を折りて去りゆく

橘の香り漂う戸田の里いにしえ人も愛でた神の木

ミーバイのマース煮肴に泡盛を琉球文化はまずは食から

古宇利島の塔から望む海の色これはまさに美ら海だちゅ

手付かずの野積み石垣今帰仁城跡歴史を刻む七百年

海望む本部の高台「花木逢」古民家のカフェに爽やかな風

百里城の南と北殿の様式で薩摩と清とのバランスを取る

地獄絵の沖縄戦を淡々とひめゆり隊の老婆は語る

小松菜

春日井 清澤 範子

中庭に降りれば椿の淡緑り今朝吹く風に揺れて光れり

ああきれいな赤白混じりの椿花廊下より大輪指にふれつつ

台風一過今朝はすっきり晴れ渡り椿の若葉揺れてつやつや

私より十歳上の姉の趣味庭にサボテン花の咲く頃

発芽率九〇%のパーセント小松菜を條に播きたり土盛上りくる

チクタクと居間に掛けある柱時計みたり三人の暮し見守りあるよ

杖をつき繁田公園にて陽を浴びぬ天気予報士の解説通り

押しボタン押して渡りて神社に來ぬ願ひを込めて祈る柏手

喫茶して心おちつき窓越しに街路樹のそよぎ暫し見てをり

椿の葉をピアノの鍵盤たたくように雨は降ります台風の風

ままならぬ

大阪 伊藤 忠男

懐かしや卒業以来の彼彼女言葉選びて語るひと時

ときめきの時は過ぎたり今は過去過去と思へどまだ過去でなし

萌え色に揺れる葉風は優しさに溢れ息づく夏の山里

花が散り新芽が香る山里の食卓飾るナズナにヨモギ

野の道を歩けばヨメナふきのとうスミレツメクサカタバミにユリ

今日曇り昨日は晴れも明日は雨とかくこの世はままならぬもの

蒔き割りの音を吸い込む五月晴れ煙たなびく炭焼きの里

気力春体力秋に年々と歩く速さも衰えにけり

柵に手をかけて掛け声勇ましく飛び越えなんと越えられぬ今

夢を追うライフワークに興味重ね今の我が世は春盛りなり

皐月さつきなれども

名古屋 近藤 映子

母の日に望みが有れば知らせてと息子の電話に嬉しきとまどい
時習館六回生は早や八十路を告げる元気な訪問嬉し

子供の日母の日もあり皐月晴れ八十路を告るわが同級生

わずかにも右手にわが意識伝わるか皐月晴れ少しの物干し

さわやかな五月晴れなど他人事に吾咳の続きて日々の過ぎ

わが家の物言わぬ亀二匹窓を明ければ寄り来る可愛い

息子より加湿器届き寝室に吸入器とで咳も減り来る

五月晴れ朝のすがしき深呼吸咳しつつ手足動かす一時

激しき咳の下火なりこんなに呼吸の楽な時あり

ゼラニウムピンク赤白咲きほこる五月の晴れ日水をやりつつ

木島神社 このしま

東京 森岡陽子

太秦の木島神社このしまの三柱組み合ふ鳥居浅草で見付く

川端に葉桜並ぶ目黒川流れゆるるかいつぶり潜る

下町の深川不動に参拝す護摩焚き修業揃う経成り

小風吹く八十八夜の茶摘み終へ地元の友より早速届く

レモンの木玄関囲む白い花ドアには書るるバレエ団名

洗足池黄菖蒲並ぶ池端に日蓮和尚の袈裟掛けの松

そよ風に木香薔薇の咲く垣根家無し猫はそつと歩きぬ

青梅のポロポロ落ちる庭の隅何故か今年は小粒のままに

雨あがり色彩やかなターフ場をサラブレットの姿美し

光琳の半世紀過ぎて並べるは二つの屏風燕子花と梅

野の花よ

東京 富岡 和子

野の花よ小さがたつなみそうが身上立浪草のむらさき映えて

あす立夏いく春秋を九十七才老君美男旅立ちの朝

通夜の刻若葉の風に清香みちひ孫ら声に和む悲しみ

祝い月両手にあまるボックスはアジサイの花嫁の選びし

聞えくる級友見舞うホームより憩いの時間カンカン娘

花すでに名残りとなりぬきり大樹学食わきの葉陰に休む

花のさま知ることとはなし公孫樹小さき実拾う小満の午後

今年また朝顔原種の落ち種をさお竹友に集めむとする

裏道を買物カートごろごろりジュウヤク咲きていま五道に

友逝きて疾く一年の偲ぶ会思い出彼方若き日のフォト

古絵図

豊川 白井信昭

古絵図と重なる景色の中にいる姫街道の気賀の関所跡

朝光^{かげ}にま昼光りに夕映えに重なり光るわが薔薇の花

浜通り歩道の舗装も新しいカラーレンガに変わりていたり

来て見れば竹島の海春の潮ただ遠々と午後の満ち潮

沖辺より風に匂へるさざ波の遠くに浮かぶ大島小島

芝芽吹き俊成苑の銅像ははるか熊野まで見すえいるらし

古に続く今日なり「昭和の日」竹島橋に今しわれ立つ

万葉の黒人の羈旅^{きりよ}歌思いつつ海よりの風に吹かれてゐたり

竹島の海御津の海一つなる三河の湖^{うみ}の内に連なる

この辺りかの常磐館^{とぎわ}立ちし跡遠く過ぎにし昔しのばれる

赤福餅

新城 半田うめ子

朝出でて西川に沿ひぬ竹生社の杉林の中小鳥のさわぐ
味のよき食品店へ今日も又孫の香奈の親切にて楽しむ
孫よりか赤福餅を貰ひたり伊勢参りにてやさしき厚意
小さきなる西川にての吾の好みかへるのそよぐ楽しく眺むる
ぼとぼと椿の花の落下する道の辺にゐて楽しみながむ

孫娘より

横浜 阿部 淑子

心臓の三十二億回拍動の功労ありて我八十五歳
真夏日の続く五月に木々の葉は幅を拡げて日除け役なり
デパートの玄關入れば大金塊さわりて見れば何と冷く
二カ月も早い夏日には日傘増しプールの子ども等水しぶき高く
恵まれし施設に入所安堵かと尋ねてみれば終始泣きごと
孫娘より贈られしブラウスを直ちに羽織る背筋伸ばして

初夏

蒲郡 杉浦恵美子

風呂湯温四度落して初夏を知るひとりの暮しは情報疎し
ともすれば天気予報さへ無関心世間話も間抜けな挨拶
五回目の五月に入りぬ夫逝きて思ふこと多きこの美しき月
夫逝きて教えてくれた限りある命を刻々感じる五月
柳見れば夫思ひ出づ南仏のローヤ湖畔の老樹とともに
一枝をペットボトルに入れて来し柳今はや見上げる高さ
一枝が今は緑陰つくる樹よ採りてくれたる夫は居ぬのに
携帯しか連絡手段がないことに今更氣付く関りの薄さ
歩けども歩けども漂う月桃の芳香トンネル首里の坂道
読書にも句といふものあるらしい『大地』の群像古めかしくて

隣家

豊川 平松 裕子

行く先を幾度も問ふ隣人^{となりびと}我は幾度も秘密と答ふ

隣家よりもたらされたる甘夏を小暗き夕べの厨に食みぬ

二階より見下す庭の姫沙羅の今年の花は未だ見えざる

父詠みし歌より知りぬエゴの木を植ゑて三年我が背を越しぬ

玄関の脇の石臼に移したりメダカの稚魚ら目のみ光れり

好物は何だったのかと問はれたり何でも喜んで食べてくれたと

逝きし姉が姿見せると言ふ嫗諾ひ聞きしは^{みつき}まだ三月前

仰向けに文庫本を読みてゐし九十才の嫗忘れじ

植ゑし日より枯れゆき枯れし四方竹節に新き葉の出でてをり

ま緑の昨日の潮と異りて今日はグレーに水平線まで

いもの蔓

豊川 山口千恵子

笑ひ合ひ酒くみかはす人も皆君に縁ありし人

新茶の香りするジャーベツト食べ終へて君をしのべる会終はりたり
里芋の芽ぽつぽつと出でてきぬ生え来るスギナ今日こそ抜かむ

夕降りし雨に倒れしシャクヤクの一枝切りぬ赤き花重し

いもの蔓四十本を挿し終へぬ雨よ降れふれ根付きゆくべし

回覧板持ちゆき仰ぐ西の空かすみて見ゆる上弦の月

朝の日を受けて歩みぬ三千歩少し色付く小麦畑の道

野の道を何も思はず歩みゆく道路かすめて燕飛びゆく

田の道をゆけばひばりの囀りのしきりに聞こゆ姿は見えず

赤々と一日限りの花の咲く赤きサボテン母逝きし頃

春はたけゆく

豊川 夏目勝弘

細細の冬木の枝のその枝に点なす緑の目に立つあした

この三日降るともなくに降る雨に喜こびゐるは草木なるらん

浅春に撒きし除草に庭さやか強^{したた}かなりし細き一本

大空を自在にすばやく飛ぶツバクロら数の少なし小さき異変

ネムの木の羽状複葉のまだ小さし眠れるまでには数日のあり

窓よりの日差しの移りの早くなる今朝はいま少し差し込みてほし

時計みて追はるる日日のなくなりぬ白檀の香煙直ぐには立たず

ふんわりと盛り上りつつ移る峯飛行機雲を消してゆくなり

若葉にて木木の嵩の盛りあがる暗^{くら}む切れ間に出入りするキジバト

移りゆくすべてを止^{とど}むることあたはずされどなれども待つものもなし

時 間

我が予定の時間を奪ひし菜種梅雨また喜こぶ人もあるらん

嬰子より病みゐる人まで一日は二十四時間朝よりの雨

我が一日は時計より始まり時計に終る眠れるときもかたへに時計

目に見えぬ雨は玉なすアジサイの新芽ににぶく光りをかへす

朝より読みゐし本から目^{あした}を^{まなこ}あげる冬木のままの細さいの枝

退職の記念の時計の止りたり単ミリ電池一本のいのち

線香にて時刻を計りし時代ありき白檀の香の煙り乱るる

年金の支給日を指折る月となる時間は平等に我にもくれる

今月の予定をカレンダーに書き込みぬ乱るることなく香煙たちぬ

隣り家より木魚の音す朝なり甦へりくる姿のありぬ

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ずくずくと日毎に伸びる葉牡丹の赤紫の花の色かな

あきらめの先に清朗あるだろか春陽射しくる中に草取る

牧原正枝

今年また忘れずきたるつばめ二羽さへづる声にほっとするかな
弓道の弓を持ちゆく中学生ら活力あふるるそのさはやかさ

岩瀬信子

あしたには雨になるやもこの夕べ電車の軋み間近に聞ゆ
番号で呼ばれ吾に医師は問ふ「どうされました」と画面に向かひて

石田文子

桜舞ふ幼の手にも花のあり開きて見せて満面の笑み

「さくらさくら」舞ひ散る花に包まれて思ひ出すかなカナリアの唄

林厚子

路地裏に行き惑ひてはこの夕餉うら寂しき声聞こえるかな

黒々の桜の幹に薄桃の花びら積もり雨の日妖し

山崎俊子

知恩院の広き廊下を渡りゆくうぐひす張りの音の楽しさ

手を合はす仕ぐさも少し大人なびて女孫十一歳は何を祈るか

三田 美奈子

突風に青磁の壺は毀されて従兄との縁また一つ消ゆ

パソコンの地図を捲かずに眺めつつ此処に運河があればと夫言ふ

水野 絹子

俊成の短歌会にて入賞せし壇上の友よわれも誇らし

重量を越えたる娘への宅急便を一つ二つと荷物取り出す

牧原 規恵

西浦の園地の丘に友と来て桜吹雪の春ゆかんとす

暮れ泥む春の夕べに空見あぐ退院できぬ孫を想ひて

稲吉 友江

遠く住む友は体調くづしたるとメールが届き寂しくなりぬ

いただきていつしか五年過ぎにつつシンビジウムに今年は花芽が

鈴木 美耶子

小雨の中友とわれとは養源院に散りたる桜踏み締めながら

養源院の宗達描きし杉戸絵の白象の前にいつまでも立つ

吉見 幸子

私の一首

あれは何庭隅を素早く走る細長い黄色の動物あれは何

遠藤脩子

生まれて初めて馳を見た折りの一首です。まるで歌になっていない、驚きづくめの言葉の羅列ですが、今でもあの時の感動が甦ります。町中から、こちらへ越してきてから、雉・緋連雀・狸・土竜と実物をこの目で間近に見る機会に恵まれ、その度に大騒ぎでした。鵯・三光鳥・梟の鳴き声も聞きました。市の水族館にカピバラが二頭きたとのこと、興味津津、この目で見てみたいものです。

なにやかやと疎心の如くして猫ココにさへ餌を惜しみて

岡本八千代

今年の四月号「侘助」の中の一首。

自分の感情の美しいところをとらえて詠みたかったのに、ある日、この時の私は、なんとなく何もかも疎ましい気持ちが働いたよう。餌をほしがって近づいてきた猫のココにさへ優しくなれずに餌でさえ惜しみつつ与えたりした。何という冷たい私であったことか。

猫はいつものようにクールで静かであったのに、その日の感情を猫に当たってしまったことよ。いやはや、私の老いらく……。

三津五郎の粋な祝の舞ひ姿閉じた幕は二度と開かず

森岡陽子

私は歌舞伎が好きで時々出掛ける。ここ二年程で人気者の花形役者が続いて亡くなってしまい、本当に寂しさを感じる。

三津五郎さんも突然逝ってしまった。夜中のラジオをぼんやり聞いていた時計報を聞いた。昨年癌からの復帰(しんきうふき)舞台寿靱猿(しんきうぼる)の筋書を出して見てしまった。板東流の代表としての彼の舞りは、品、色気等兼ね備え、それは美しい姿で見た人は誰もが心奪われた事だど想います。本当に悲しく残念で仕方ない。

うすれつつ形くづれそして消ゆちぎれ白雲正月の空

夏目勝弘

ここ四十年余り正月に空などゆくり眺めることなどなかった、というよりそのような時間がとれなかった。今は一日中でも空を見ている時間がある。見るということは、ただぼーと眺めているのではなく、思いを持って見なくては何も見えない感じない、思いとは何かその時々により違うが何かを考え続けなくては、思いはもてない何事も進まない、出来ない、短歌一首作るにも思いなくしては作れない。

現代学生百人一首

東洋大学

のんびりと階段のぼるおばあさん一度追い越し手をさしのばす

広島県立宮島工業高等学校

三年

胡^{えびす}

美咲

あれもだめこれもだめだと言われているルールの外へ飛び出したいの

福岡女学院中学校・高等学校

三年

永田

好^{このみ}

毎週末飛ぶように帰る寮生達汽車の中はてんやわんやで

阿南工業高等専門学校

一年

関

風^{ふう}

花^か

磨かれた楽器と共に向かう先吾を待つてゐる新たな音符

早稲田大学系属早稲田佐賀高等学校一年

西嶋友香

夜桜の向こうに逢いたい人がいる停止線から少しはみ出す

早稲田大学系属早稲田佐賀高等学校三年

芳^{ほう}司^じ

直^{すなお}

教科書でいつも見ていたこの景色清水寺はここだったのか

佐世保市立清水中学校 三年 永山 萌^{もえ}

稲刈りを手伝ってくれと言う祖父に農高生の力を見せる

長崎県諫早農業高等学校 二年 川久保輝隆^{きりゅう}

震える手悲鳴をあげる右脚に想い託した最後のバトン

鹿児島県種子島中央高等学校 三年 島崎 一^{いっ}啓^{けい}

不発弾今日もみつかる沖繩^{うちなー}の「戦争おわらぬ」と吾が母なげく

昭和薬科大学附属中学校 二年 渡 貴人

国境を越えて届いた母からの自筆の手紙にじんで読めない

慶応義塾ニューヨーク学院二年(アメリカ) 山中美沙季

『俳句』

藁の子にして目ン玉の四方睨む
上州の見渡す限り田水張る
伝説の大蛇の池や五月山

松本周二

曲り来る子供神輿の声の路地
野の草の色に紛れて青蛙

山元正規

青蛙跳んで鞍馬の木の根道

夏蜜柑一つ携へ会ひにゆく

今泉由利

去年の葉とこの年の葉と樟若葉
こぞ
蝸牛かたつむりフランス風に食みにけり

代掻や流るる雲の速き影

川井素山

酒肆の灯や誰待つ軒の釣忍
雨蛙吾としばしの睨めつこ

小魚の付従ひて布袋草

小柳千美子

はたた神暁の夢突き破り

膨らみしランドセルゆく青田道

朝風に若葉裏見せ表見せ

重野善恵

立夏とてまだ羽織るものしまひかね

菖蒲笛音冴え満つる湯殿かな

清流に足を滑らせ夏は来ぬ

田中清秀

夏蝶の肩を離れず杉木立

宿坊にコントラバスの牛蛙

木の根方跳ぶ気配なる雨蛙

森岡陽子

駆けゆくは青葉鮮やぐ芝走路

樟脳を入れ替へ手には紹の着物

墓闇から闇へ消えにけり
ふてぶてしのそりのそりと墓
大きさに不足はなし墓

柳 田 皓 一

池の端其処此処に居る夏蛙
樟若葉芳香来りて目を閉ぢぬ
子供の日足音を立て橋渡る

和 田 勝 信

自転車の細きタイヤや柿若葉
打水に生れし虹をひとり見る
箒目の清々しさや夏の月

米 田 文 彦

十薬の白の眩しき退院日
谷渡る鯉千匹や若葉風

小 池 清 司

畑中の農夫呑み込む麦の波

手を繋ぐ父と子の道聖五月

植村公女

新樹光シースルーエレベーターかな

転院の電話の黙や花は葉に

犬の子の草にいねたる熱さかな

正岡子規

六月を奇麗な風の吹くことよ

送られて別れてひとり木下闇

ひとつ脱いで後におひぬ衣がへ

芭蕉

涼しさを我宿にしてねまる也

かさねとは八重撫子の名なるべし

曾良

かさね吟行会

「洗足池公園」 五月

田中清秀 吟行記
山元正規 選句

万延元年（千八百六十年）幕府は日米修好通商条約の批准書交換のため咸臨丸を米国に派遣する。勝海舟はその咸臨丸に乗船して渡米した。さらに、江戸末期の戊辰戦争では幕府の軍事総裁として江戸城の無血開城を成し遂げ、明治維新後は参議、枢密院顧問などを歴任し伯爵に叙せられている。その勝海舟がこよなく愛し晩年を過ごし、また、墓所ともなっている洗足池、五月のかさね吟行会はこの公園で開催された。

平成二十七年五月八日晴れ、参加者は川井素山、山元正規、米田文彦、柳田皓一、和田勝信、今泉由利、森岡陽子、小柳千美子、山迫京子、重野善恵と筆者の十一名であった。

まず隣接する妙福寺を尋ねる。日蓮上人が常陸の国に向かう途中ここで休息し、傍らの松に袈裟を掛け池の水で足を洗ったと伝えられる「袈裟掛けの松」は三代目であるが今も境内に残る。この一帯は静寂で厳かな雰囲気

が漂っている。

神殿に柏手高く夏木立
袈裟掛けの松にも清し五月空

素山
善恵

池端に戻りウッドデッキの道を進む。水辺にはガマやアシの水生植物群、浮き葉とスイレンの可憐な花が咲き小蝶がわずかに飛び交い初夏の爽やかな風が芳しい。

池の東側には晩年をこの地で過ごした勝海舟夫妻の墓石が仲良く並び薫風に白く佇んでいる。また、勝海舟が西郷南州の死を悼み自費で立てた留魂詩碑も傍らに残されている。

元勲の白き墓標や風薫る
大池や初夏の風吹く夫婦墓
南洲の漢詩の石碑夏の蝶

清秀
陽子
勝信

さらに池を左回りに進むと千束八幡神社が現れ、鳥居のそばには名馬「池月」の銅像が新緑の木立に囲まれ今にも走り出しそうに置かれている。社は平将門の乱の鎮

守副將軍の藤原忠方の氏神であり、名馬像は源頼朝が宿営した折に池に映る月のような逞しい姿の野生馬が現れ、その後の戦において大いに勲功を立てたと言われる駿馬である。秋の例大祭には重要無形民俗文化財となっている神楽が奉納され秋祭りとして親しまれている。

緑さす池月といふ駿馬像

千美子

小社を包みてやはき新樹光

正規

紫蘭咲く寺の仄かな花明り

皓一

洗足池の水源は大小の湧水で用水路を通して池に流れ込んでおり水量も豊富である。また、都内有数の桜の名所であり、休日はスワン形の足こぎ舟、手漕ぎボートなど多くの家族連れで賑う遊園地でもある。今は岸辺にはみずみずしい若葉が池を囲み、鯉や亀が群れ泳ぎ、残り鴨が数羽並んで優雅に初夏の水面を泳でいる。

万象は若葉みどりの中にあり

由利

心地よき葉ずれの音や若葉風

京子

新緑の小島に朱き鳥居かな

文彦

今回は昨年亡くなった佐藤喜仙主宰の一周忌を偲ぶ会として行なわれ、洗足池は師の自宅に近く生前に散策されたゆかりの地でもある。在りし日の教えを思い出しながら絶好の日和の中、吟行は恙無く終了した。その後、句会は大岡山駅前のレストランで行なわれ献杯のあと会食となった。

囑目三句出し、各自吟行の思いを十七文字により込み推敲する。その後選句と講評へと進む、いつもの如く秀句が揃う。

■かさね吟行会■

日時 七月十日(金)

場所 目黒碑文谷散歩

集合 目黒駅(JR側) 十一時

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（三十九）

丸山 酔宵子

『クールジャパンと秘境温泉』

平日の昼下がり。和光と三越のある銀座4丁目交差点には、買い物袋を両手にいっぱい抱えた信号待ちの東南アジアや欧米の外人観光客で溢れている。本年度の外人観光客の数は1300万人を超え、15年前の2000年（平成12年）の約500万人と比較すると、3倍弱のハイペースである。銀座などの繁華街では、日本製の電気製品、化粧品、薬品の〴〵爆（バク）買いで、銀座通りを我が物顔に闊歩している。

今や、お金持ち外国人のお目当ては、〴〵爆買いだけではなく、日本の秘境温泉まで押し寄せている。東京から上越新幹線で約1時間30分。上毛高原駅には大きなト

ランクを抱えた外国人の家族連れやカップルが降り立ってくる。「お待ちしました・」旅館番頭の「揉み手仕草」宜しく、旗を片手に、驚くなかれ流暢な英語で客案内しているのである。またある東南アジアの一团には、中国語で話しかけ、大型バスに誘導している。

上毛高原駅から谷川岳の麓、『水上温泉郷宝川温泉汪泉閣』は、谷川岳を望む溪流の一角にへばりつくように聳え建っている。木の香りが漂う広いフロントには、英語、中国語、タイ語、インドネシア語、日本語が入り混じって国際色豊か。外国語に慣れた従業員が、それぞれに部屋のキーを渡し、迷路のような部屋を案内している。

溪谷を見下ろす部屋で浴衣に着替え、〴〵、Reuters（ロイター通信）が世界ベスト6温泉に選んだ野趣溢れる大露天風呂へ。4月末、都会では桜も散って、初夏の陽射しが降り注ぐ頃、谷川岳の麓には、まだ雪が残っていて、谷川の兩岸には遅咲きの梅と桜が健気に咲きそ

ろっている。手付かずの大自然の宝川の流れの中に、「摩訶の湯」「般若の湯」「子宝の湯」「麻耶の湯」の四つの露天風呂あり、その広さは470畳、50メートルプール2個分程。勿論すべて混浴で、外人も堂々と前を隠さず楽しんでいる。

流石に女性たちは万国共通、男たちに比べて多少の恥じらいの世界が生きているようである。宿の用意した、ハワイのムームースタイルのワンピースを着て、豊満な形の良い胸を思いつき膨らませている。胸の谷間に目を注がれ目のやり場に困って遠くの岩陰を見てみると、仲睦まじいゲイかホモのカップルが、ひっそりとお湯に浸って、イチヤイチャしているのである。

「ヨーシ・・、俺も日本男児！」とばかり手拭いを肩にかけ、粋がつて、4つの湯を制覇したのだが、谷川の風はまだ冷たい。

湯から上がり、谷川沿いの竹林に設（しつら）えた宴

席に行けば、名物熊汁とともに、旬の山菜料理が用意されている。先ずは宝川清流の岩魚を焼いて、そこに熱燗を注いだ岩魚の骨酒で、湯冷めした体に先ず一献である。「アーツ・・・ウメー・・・腹に滲みる・・・」

湯冷めして腹に滲みいる岩魚酒

酔宵子

ある自然科学者の手記 (38) 大橋 望彦

「又、田名部へ帰る」

私の伯母は、同藩の野村円蔵へ嫁ぎ、三人の子を儲けました。兄を久孝、妹をお久、次男を英二と申します。事情あって、伯母は離縁となり、鈴木家へ戻つて居たので御座います。

野村家では後妻を入れ、兄の久孝は、柳津の円蔵寺へ養子に、お久は、越後で庄屋を勤める遠藤家へ遣わしまして、英二丈を家に遣して居りました。

処が、私が青森から帰つて見ますと、英二さんが、我家の人となり、学校へ通つて居るではありませんか。伯母が母に頼んで置いて居たのではありましよう。英二さんと私とは一つ違いで、兄弟のように仲良く遊ぶ事もあります。又腕白盛りで、随分悪戯をします。そのたびに、私は泣かされますので、之が、母と伯母との言い合ひの基となり、母も中々辛かつたと存じます。

私は、間も無く学校へ通うよに成りました。その頃の学校、殊に僻地寒村の事です。準備も不十分で、男子は午前中、女子は午後という風に成つて居りました。

其の年も暮れ、明治六年の春、或る宿屋から使いが参り『神盛徳と言う方の奥様が、是非光子様にお目に掛かり度いから』と申しました。心当たりもないのでよく考えますと、青森に居りました時、野田家へ折々見えた奥庁のお役人です。早速旅館へお伺い致しますと、『よく来てくれた、実は田名部へ長らく出張を命ぜられ、家内同伴で来たのだが、不案内の土地とて知人が少ない故、当分、家にきて手伝つてくれ』とのお話しで御座います。母は、学校へ通学させて下さるならばと、許されましたので、私は、神家の人となり、奥様のお相手を致し、午後は学校へ通わせて頂きました。

田名部の北三里に、恐山という火山があります。内地では見ら

れない面白い所だから是非見物してはと勧められ、家の母等と一緒に登つて見ました。其の話を致しましょう。

此の恐山は、釜伏山という丁度釜を伏せた様な山の後ろにありまして、田名部、大畑、川内から、夫々三里あると、言われて居ります。その途中には、一軒の住家すら無く、森々とした樹立を過ぎますと別れ道があり、其処に行く手を指差した石地蔵が淋しく立つて居ます。

山の形は、蓮華の中の様であると申します。入り口の三途の川には、大きな太鼓橋が掛かり、盗み心のある人は、決して渡れる事が出来なと言ふ古からの申し伝えが御座います。一・三丁進むと、正面に大きな地藏尊が安置され、左にお寺、右に長屋が幾軒か並んで居ります。此の家は、山へ登る人の為に、設けたのだそうですが、全くの無人で世話する者は誰も居らず、登山者は、米、味噌、薪炭等一切自分で持参し、只居室を借りるのです。私共も、米味噌等を馬に付けて登り、此の長屋で一晩泊まりました。

翌日は、案内者を雇ひ、地獄廻りを致しました。先ず第一に、弘法大師の建てられた塔婆、之は、根元は何とも無くて、上から段々腐つてゆくと言われて居ります。血の池地獄、念仏地獄、鍛冶屋地獄様々の地獄が御座います。何にしろ硫黄山の事です。終始あちこちから湯が湧き出しますので、草履では歩けず、下駄を借りて履きました。入浴の出来る温泉場が三ヶ所あって、何れも草津同様万病に効果があると、言伝えて居ります。又此の山は活火山故、終始鳴動して物凄く、誠に気味の悪い所で御座います。

二日ほど見物して、神家へ返りましたところ、奥様は、妊娠中のご養生の為、御国元へ御帰りに成りましたので、私も残念ながら、御暇を頂き我が家へ戻りました。

『上京の悦び』

緑濃く、南部特有のガスが立ち籠める六月頃であります。待ちに待った東京の野口様から御頼りが、反物と写真に添えて届きま

した。野田様は遂に、青森県大参事をお辞めになり、陸君会計軍吏に御就任になりました。お手紙には、家内揃って上京するようにとの仰せであります。予ねての望みが叶いますので、天へも昇る心地して悦びましたが伯母は、余り進みません。と言うのは、実子の英二さんと、別ねばならないからで御座います。母は、思案の末、それでは、英二さんも一緒に世話願う様、お願いして見ましよう、厚かましくもその旨を手紙に認めお願いしたので御座います。

先様でも、ご都合のあること、見ず知らずの英二までも引き取れとは、野田様も、ご立腹になったのでしよう、折り返しお断りがありましたので、伯母は英二を残して上京を嫌がり、其の儘沙汰止みとなって仕舞いました。

然し、御親切にも、野田様から母の里の小野権之丞へ、色々お話があり、小野伯父から、鈴木家の出世の為、野田様のお勧めに従う様に、懇々と申して参りました。母の心も、大いに動きました所へ、今迄県庁から一日三合づつの扶持が廃止となり、一人前八円宛ての一時金を下され、今後は何処へ行くとも勝手である旨の御沙汰がありました。

祖母が亡くなった当事のどん底生活に比べますと、只今では一家の生活も、余程貧乏に慣れ、又世間様も同情して、仕立て裁縫の内職を次々に頼まれ、食物には不自由なく、私と英二さんの二名を、学校へ通わせる位の余裕が出来たので御座います。然し、僅かな一時金の下渡しで、今後一切の御扶持が、廃止となつては、生活の上で大変革を行わねばなりません。田名部の様な火山灰の土地で、耕作するより、どうせ開墾事業に従事するのなら、北海道の広々した土地に移住するほうが増したと、一家家族を引連れ、海を越え北海道に渡り、成功した会津藩士が多かったので御座います。

私共の家は、女子ばかりで、農家等は思いも抛りません。万一、野田様のお勧めが無く、他にもお世話下さる方が無かつたなら、

御扶持の廃止後は、又々路頭に迷つたものと存じます。夫れを思い、之を思うと、野田様こそ、鈴木家の救世主であつたと申しても、過言ではありますまい。

それ故伯母も、遂に折れて、英二を五ノ戸の里方へ帰し、一家は上京致しました。

その当時野田様から戴いた書簡を保存してありますから、此処に記載致す事に致します。

野田^{たにみち}豁道氏より母に宛てた書簡 (原文のまま)

(明治六年四月二十五日発信)

日にまし暖かに相成り候ま、皆様御揃ひご機嫌よく御暮しなされ目出度存し上候。先以て先日細々と御返事下され、くり返し、まき返し拝見致候。右に付、なほご返事も差し上げ申すべくの処、私事も二月初より鎌倉へ出張致居、漸く一昨日帰京候ま、心ならず御返事延引致し、思召しの程もお気の毒に存し上候。

さて御上り一件に付いては、態々御親様鎌倉まで御出で御願ひ、ご相談申上候処、御光殿身の上に付ては、段々皆様思召の程も被為在候故、ついては無理に御もらひ申上候訳にも参り不申、まことにまことに残念に存し上候。其の訳と申すは、かねて生れつき器用に候ま、当地の女学校に頼み、二三年修業致させ候はば行末はきつと女教師とも相成、御親兄弟様は御安穩に暮しもつける様相成可申、此頃は女にて家名相続も差支御座なく候ま、かたがた御上り御勧め申上候訳に御座候ま、不悪御くみ下さるべく候。

尤此上縁も御座候て御上り被為在候はば相変わらざる、私だけは御世話申上べく、かへすがへすも御光殿大切の年頃、田舎にて杳果させ候事、光ある玉を磨かぬ様なものにて、残念の程申すばかりなく候。先ずは荒々ご返事まで申上度めで度かしこ。

四月二十五日

野田

鈴木御兄弟様

お光殿

絹の話 (56)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

2015年私の絹研究

「人を魅了する野蚕絹の艶とは何か」

現在世界に流通する商品を作っている野蚕は中国の柞蚕インドのタサール蚕、ムガ蚕と日本の天蚕です。

柞蚕、タサール蚕、天蚕の繭の色はそれぞれ薄茶、茶、緑と違っていても、糸に加工すれば殆ど見分けが付きません。(それぞれ虫のDNAは人間でいえば兄弟くらいの違いです) 精練された糸はいずれもシャンパンゴールド色の実に美しい輝きを見せます。またムガ蚕はシャンパンゴールド色をもっとも濃くした金より艶やかな黄金色の光沢を放ちます。この色を見た人はモンシロチョウが菜の花に集まって来る様に、品物の形状が判別出来ない遠い距離から集まって来ます。特にムガは15m以上の遠距離から人を引きつけます。また不思議な艶が目には焼き付きその前を通り過ぎて戻って来るなど、特異な動きが見られます。

いったいこれはどうゆう事なのかを解明したいと思います。

「糸の多孔質(ナノチュウプ)と光の波長」

これらの糸はいずれも1本の糸の中に数百のボイドがあり、孔の中の片面が繊毛に覆われています。

糸の表面に光が当たると大部分は糸の形状により乱反射してしましますが、孔の大きさに合致する紫外線領域の400ナノ以下の波長が一部吸収されてしまうのです。吸収された光の一部はプリズム的屈折を繰り返して外に出て行き、外に出なかった部分は熱に変換されているようです。それもエンドレスに続けられ、満杯になりません。

波長の短い光は大きなエネルギーを持っていますので、通常ですと紫外線を長時間受けると破壊されたり死に至りますが、この孔の中に入った光は直ちに熱に変えられてしまうのです。繭の中はどんどん高温になり蛹が死んでしまわないか心配になりますが、この多孔質構造は故障しない高性能のラジエターの役目を果たし、たちどころに放温し、サーモスタットの様に繭の中の蛹が快適に過ごせる温度を保つ様に工夫されているのです。

(絹を着ている人は熱中症や低体温に陥り難いのはその為です)

結局これら野蚕の糸(織物)を見ている人は太陽光(800~400ナノ)の光のうち400ナノ以下の波長を一部カットされた乱反射状態の光と糸に含まれる少量のタンニン(色素)、天蚕ではフラボノイドを認知して

いる事になります。

【野蚕絹の艶は構造色】

玉虫厨子は千年余過ぎててもその光沢は衰えていません。それは染色された色（紫外線により破壊される）ではなく、羽を作るナノ構造が反射する光だからです。

野蚕絹も数百個のナノチュウブにより玉虫と同じ様な構造色を作り出していると思えます。

先日東京国立博物館に江戸時代の着物で天蚕糸の一部に織り込んだ着物が展示されているというので、見て来ました。その部分だけ、現在私共が扱っていると同じ状態の艶が見事に残っていました。

したがって野蚕絹は糸の多孔質構造を壊さない限り、玉虫の様に艶が失せる事はないと云う事だと思えます。

【最初の実験】

野蚕絹の製品を見た全ての人が上記の様な反応をするか疑問です。そこで性別、年齢、人種、職歴、学歴、居住地域になど様々な人に野蚕絹（タサール蚕、ムガ蚕、エリ蚕）と家蚕に通常太陽光と光の波長を様々に操作した光を当て、それぞれの人がどの様に見えるのか調べてみようと思っています。波長の短い蛍光灯の下で見る色と、外の光で見る色が違って見える事を経験された

人は大勢いらつしやると思います。また男女の識別差も少しあるようです。職業としてソムリエがいたり、宝石の鑑定士や音響調律師等がありますが、光の鑑定士はいません。光に関しては全ての人が少しづつ違った受け止める方をしているからなのでしょう。

それぞれの絹の艶が様々な人にどの様に見えるのか、その結果が楽しみです。

【第二の実験】

デパートなど大型店舗の照明は急速に蛍光灯からLEDランプに変わりがつありますが、此れ等の照明ではないずれの絹も美しい艶を見せてくれません。旧来の少し赤みのあるハロゲン球の光（波長が長い）を当ると、いきいきと輝き、遠距離から人が集まって来る事は以前に話した通りです。

紫外線領域の中では野蚕絹着用者は極めて見えづらくなり、ポリエステル着用者は青白く光って見えます。

多孔質の野蚕絹は各種孔の数や糸の形が少しづつ異なっていますので、紫外線領域の光の波長の吸収、乱反射も各種様々と云う事になります。つまりどの種類の絹がどの波長の光を受けた時、最も美しく輝くのか調べてみようと思います。また人間の目も、どの様な光の波長の時、どんな識別能力を発揮するでしょうか。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

四十六回

「月虹」 鯨島 満

二十二 板垣家子夫 6

宝泉寺の庭雪踏むもそぞろにてみ霊しづまる墓に額
づく

『礫底』昭和三十年

蹲り蠟ともすときみ墓べの土陽に乾く香さへ恋しも

題詞に「齋藤先生三回忌」とある。金瓶の茂吉生家下
隣の宝泉寺境内に建つ茂吉の墓を詣でた時の歌。二首目
で土の香さえも恋しいということに深い思いがある。

君をりて茂吉先生を迎へ得きかの頃の世のさま思ひ
出づ
『湧水』昭和四十四年

題詞に「挽歌 二藤部兵右衛門氏四月十九日午前五時
三十分狭心症にて急死す。五十九歳なり。法名曉徳院釈
房知」とある。

二藤部は、茂吉が金瓶から移居するとき、「聴禽書屋」
と呼ばれることになる住居を自ら提供して板垣とともに

茂吉の世話をした人である。

板垣は《随行記》に、離れを貸してくれることを二藤
部に快諾してもらったことを書き、さらに毎度三度の食
事の用意をもらうこと、掃除、洗濯などの雑事をし
てもらうこと、家賃を取らないことなどを引き受けても
らったと書いている。二藤部は敗戦直後困難な時代の十
月、このようなことができるほどの素封家だったのであ
る。茂吉から短歌の指導を受けたことのある高橋宗伸は、
二藤部家のことを「元は大石田町屈指の大地主で、その
邸宅の広大さ、大樹をめぐらしたたたずまいは、かつて
の地主の町としてその富有さを誇った大石田町を代表す
るような屋敷であった」（『白き山研究』）と述べている。
板垣の家は道路を隔てた向かい側だったからほぼ毎日
のように出向くことができた。

虹ヶ丘の裏方の山墾^{ひら}かれて畑に変わるをいきどほり来
つ 同

虹ヶ丘は、茂吉がたびたび訪れた今宿薬師堂から登っ
たところがかつては薬師と呼ばれていた。この丘に昭和
三十一年に茂吉の歌碑「最上川の上空にしてのこれるは
未だうつくしき虹の断片」が建てられた。右の歌は、
茂吉の人口に膾炙している歌碑の建つ丘が時代の流れの
中で「墾かれて畑に変」ってゆくのを見て嘆いている。

師のみ墓成りぬ今日より鎮まりてみ霊いまさむわが
寺の庭

同・昭和四十八年

遠くよりまた近くよりわが友ら集るさまを見ていま
すらむ

題に「故郷の墓」とあり、詞書に「昭和四十八年四月二十二日、昨年来着工したる茂吉先生の墓開眼・歌碑の除幕式を挙ぐ」とある。つまり、板垣の熱意により東京の青山墓地、金瓶の宝泉寺に次ぐ茂吉の第三番目の墓が建てられたことをいう。一首目の「わが寺の庭」は大石田の乗船寺境内のことである。この時、墓とともに建てられた歌碑には「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも」(『白き山』)が刻まれた。

墓に納められた茂吉の遺骨は、宝泉寺に分骨を埋葬する時に感極まった門人の結城哀草果が一部を持ち帰っていたものであった。二首目には、茂吉も喜んでいるだろうとの気持ち込められているよう。

何もすることのなきままに家出で来茂吉の墓の石拭
きをしつ

同・昭和四十九年

茂吉哀草果冥府再会を想ひをり命保つわが果敢なき
思念

一首目は茂吉の墓が大石田にも建っていつでも参ることができるようになったことを意味する。二首目には「結城哀草果氏逝く」と題詞にある。茂吉の疎開後の移居先、そして第三の墓を大石田に決めるに際して大きなかわりを持った哀草果の死は板垣にとって大きな悲しみであった。

世になきを疑はず夢に会ひてぬき茂吉先生かくにさ
んそして吾が妻

同・昭和五十二年

深々と雪に埋れて籠り^{いま}在す君が寂かなるおくつきど
ころ

君が行きし最上川べの移ろひを訪ひ来し人は嘆くに
もあらず

今^きのわれの八年前の齢には残年の生と言ひていまし
き

「冬夢」と題する一連。一首目は、今は亡き茂吉、かくにさん(二藤部兵右衛門)、そして妻を夢に見たというのである。三首目の「訪ひ来し人」は茂吉の足跡を訪ねる研究者や旅行者などのことであろう。四首目。二人の年齢を比べると、この年、板垣は七十三歳であり、茂吉六十五歳の頃の言を詠んでいる。茂吉には「あたらしき^{とき}時代に老いて生きむとす山に落ちたる栗の如くに」(『白き山』)他がある。

楽しい時間 32

山本紀久雄

2015年5月31日

カンボジアに絹緋の森をつくった日本人(2)

カンボジア・シエムリアップ近郊の「KTC」(クメール伝統織物研究所)の「伝統の森」、ここは所長である森本喜久男氏が、クメール王朝から続く伝統的なカンボジアの精緻な絹緋を再現したところであり、森本氏の「思想」を手作り感覚で現実化させた森である。

その「思想」、それは自然と共生である。その背景を森本氏は次のように語る。

「自然は常に変化しており、この変化する自然を相手にしている。だから常に自然を深く観察し、その変化に対応するだけが、この森での生き方で過ごし方である」

したがって、当然にマニュアルは無いし作れないし、計画的な生産も出来ないことになり、ラルフ・ローレンとは取引があり得ないことになる。

ここでは素材の蚕もここでつくっている。蚕を育てる小屋には、殺虫剤をつけた人は近づけない。蚕は化学品に微妙な変化をしてしまうからだという細心の配慮である。

他の地区、例えば、インドやアンデス、あるいは雲南の山の中で、多くの布は手作業で織られていて、これをハンドメイドと称しているが、実は、素材となる糸は市場から購入したもので、機械によって引かれ化学染料で染められたものが当たり前になっている。

しかし、ここは違う。ヒューマンメイドである。一切、機械的な工程を経ず、化学的なものに触れることなくつくられていく。本当の自然の、人の手だけでつくられた布のやさしさの極である。

だから、「KTC」の絹緋布は「まとうと気持ちよくなる」「まとうと薬になる」という。「まとう」という言葉と意味、今では死語になっているが、「まとう」とは、本来、その布が身体の一部になる、という実感を表している言葉なのだと強調する。

また、ここで働く人たちにノルマはない。仕事したいときに来るときに帰る。

赤ちゃんや子供を連れてきて、一緒に仕事しても構わないし、大歓迎である。お母さんの目の届く範囲に赤ちゃんや子供がいることが、働く人の生きがいになる。

さらに、出来あがる商品のデザインも、下図や図案があるわけではない。出来あがるデザインの内容は織手の頭の中にあつて、それが手先を通じ織機の中ででき上がっていく。だから、織手の感情が完成した商品に頭れていく。ある女



性の例だが、20代の頃、急に商品が「色っぽくなった」と感じた。どうしたのか、と思っていると、しばらくしてこの女性が結婚を決意したという。女性の気持ちが絹緋に表現されるのだ。

この女性は、結婚した後もここで働いている。30代になって、仕事が一段と出来るようになると、布に「風格が出てきて」、今は40代だが子供3人いて、安定した家庭を営んでいるので「やさしい」布地になっている。これがヒューマンメイドという意味だという。

森本氏がカンボジアの伝統絹緋と初めて出あったのは1908年、31歳の時だった。タイのバンコックにある国立博物館の一枚の絹の布だった。鮮やかな赤を基調としつつも少し大きめの唐草風の模様が菱形の縁で包まれ、全面に繰り返されていて、それは、とても力強い大胆さをもちながらも、精緻な絹の仕事がなされたものであった。

その後、同様な絹と出あいたいと願っていたところ、1964年のカンボジア・プノンペン国立博物館で同様の絹に出あった。

1995年にカンボジア・ユネスコのコンサルタントとして「絹織物の製造と市場」を調査し、村々を回って分かったことは、絹織物の伝統が村から消えかけており、カンボジアの伝統織物の復興に取り組みたいという強い思いが湧いてきて、1996年にプノンペン郊外に「KCT」設立、2000年にシエムリアップへ移転し、2003年から「伝統の森」に着手し現在に至っている。

その間、多くの困難の中、荒地の開墾と畑づくり、木々の植栽を通じて、織物製作に必要な自然素材を自給自足できる工芸村を実現させた。

以前は森本さんを「カンボジア伝統織物の復興に携わる友禅職人」というような人物紹介が多かったが、今では「カンボジアに村をつくってしまった日本人」と紹介されている。

「KCT」の経営は、ここで織り上げた布の売上と、年間1000人もの訪問者による収入によって賄っている。

森本氏の思想は「伝統は守るものではなく、創るものなのだ」であり、その思想目的を達成させるためには「面」の活動に力を注ぐのでなく、抜きこんでた良質の織物を産み出す「点」をつくることに特化する戦略である。

「点」戦略の具体化は、小回りが効き、意思が伝わりやすい、つまり、限られた予算と時間と人材を、最大限に活かす方法をとることで、別の言い方をすれば、やりたいことをやりたい人とするビジネスで、それなら少数でよいわけである。

また、少ないほうが、無駄な時間や金を使わずに、結果を確実に出しやすい。やりたくない人を説得する時間は無駄ではない、という思想につながる。

森本さんの活動、それを突き詰めていくと、どのような経営セオリーになるのだろうか。

一言で述べれば「自らが関心を持つ分野について、それを深く掘り下げ、他の追随を許さない特化したシステムづくり」といえる。森本氏は特化システムの実現を目指して、カンボジア・シエムリアップ近郊に「KCT」「伝統の森」を発想し、つくりあげたのである。

この事例は「自らの力を信じ、他者に頼らず、誤_{まちが}わず、システムを構築していく」ことの大事さを教えてくれる。

参考にすべき重要な事例であるが、なかなか出あえない。だから出あうと楽しいのだ。

楽しくマナー ①

辻 照子

ワインを楽しむマナー ①

マナーなんて堅苦しくてどうもと。。。でも大事な席で、マナーを知っているとリラックスして、楽しい時を過ごせます。

- ・ 洋食の正式なサービスは食べ物左から、ワインに限らず飲み物は右側から注ぐ。よってワイングラスは右上にセッティング。
- ・ 飲み頃に冷やしたワインが温まらないようにワイングラスはステム（脚）の部分を持つ。
- ・ 短いステムのブランドグラスは、グラス部分を包むようにして持ち体温を伝えて、温めて香りを楽しむ。
- ・ ワインはなみなみと注がずグラスの半分くらいまで、注ぎ終わったらボトルを少しひねってから持ち上げるとしずくが垂れない。
- ・ エチケット（ラベル）を上にして注ぐとワインのしずくが垂れたとしても、ボトルの顔といわれるエチケットを汚さずに注げスマート。
- ・ 飲み物を注いでもらう時、グラスを持ってしまいがちだがワインやシャンパンはグラスを持ち上げずに置いたまま。

以上、テーブルマナーのほんの一部。

「ワインに関することわざってありますか？」 5年以上前からご夫婦で参加している奥さんからの質問。

「ワインのない食卓は太陽のない一日の如し」と言うフランスのことわざがある。

1980年頃より生活を楽しむためのマナーやテーブルセッティングの講師として各地で講演、当初はこのことわざを例にしてワインやマナーを楽しむ話をしていたが、最近はずっかり忘れていた。

太陽と同じくらいワインを愛しているという事なのか。フランスは緯度が高いので、冬は日照時間が短く尚且つ曇りの日が殆どで、太陽がない日々を過ごす、街で知人に逢うと「Bonjour Madame Le Ciel Gris（灰色の空）」とハグして憂鬱そうに空を見上げ「Le Ciel bleu（青い空）」の輝く太陽にあこがれる。食卓でも「夏のバカンスはどこへ行こう？」とワインを飲みながら太陽に思いを寄せ、ずーと先きの夏休みの話に花が咲く。

この日のレシピにワインとチーズ、パンを添えればおしゃれな食卓になります。おもてなしにもどうぞ。

*春キャベツのアンチョビ風味

鍋にみじん切りにしたニンニク、アンチョビ、バターを入れ、ちぎったキャベツを加え蓋をし4〜5分蒸し焼きにしてから混ぜ、塩で味付けをしオリーブオイルを入れる。

*ささ身とアボカドのレモン和え

ささ身は筋を取り、塩とワインで下味をつけ、レンジ

(100g・2分)にかけそぎ切りにする、1cm角に切ったアボカドと醬油で溶いたワサビで和え、レモン汁をかける。

*白身魚のから揚げ

白身魚はひと口大にし、水気を取り、小麦粉をまぶし160℃の油でゆつくりカリッと揚げ塩・こしょうをふり、パセリのみじん切りをまぶし、レモンを添える。

試飲するワインは

白ワインは *シヤルドネ *ヴェルディツキオ
赤ワインは *ピノノワール *シヤトールクリネ *ロ
ズシヤテル

「このボトルの絵の場所はどこですか？」と質問。

軽くて酸味のある

赤ワイン(ロズシヤテル ルージュ)のエチケツトに描かれている庭園。パリの南西22キロの位置に、太陽王とよばれた

ルイ14世が1682年に建てたフランスのベルサイユ宮殿の庭園のようである。ルイ14世は1638年、パリ西郊セーヌ河畔 サンジェルマンアンレイ城で生誕した。パリからRER(地下鉄)で20分位のサンジェル



マンアンレイ市はパリを一望できるテラスのある大きな公園と城のある住宅地。庭から城が望める Rue Thiers st. german en laye に1972年頃から住み、パリ郊外の生活を楽しんでいた。その後帰国してからも何度か、ヨーロッパの葡萄畑やワイナリー巡りのついでにサンジェルマンアンレイを訪ねた。生活をしていた街並みは少しも変ってない、娘たちを送り迎えた幼稚園や小学校、息子が産まれたクリニク、ポスト前広場の朝市、駅前の教会、離れ家を借りていたオーナー Mme Fortain の邸宅。すべてが当時のままの風景。

「赤ワイン(シヤトールクリネ)にカスのようなものがあるんですが大丈夫ですか？」と質問。

今回試飲したシヤトールクリネはかなりの「おり」が残っている、重くタンニンが強いコクのあるワイン。白ワインは皮と種をとりのぞくが赤ワインはぶどうの皮と種を含めて仕込むので「おり」がでやすい、その為赤ワインのボトルの底は上げ底になっていることが多い、あげ底の部分に「おり」がたまるので大丈夫。「おり」の多い赤ワインは全部注がずボトルにワインを少し残すようにするか、デカンタをすると「おり」がグラスに入るのを防げる。

料理やワインを楽しんで皆さんかなり盛り上がり、滑らかなになった口でいろいろ質問が。このまま話を続けると、お泊りすることになってしまうので、つぎは5月の講座で。。次回の料理とマナーは「日本酒で乾杯」お楽しみに！

「歴代天皇御製歌」(三十七)

貫名海屋資料館

「後三條天皇」第七十一代、一〇六八年(三十五歳)―一〇七二年(三十九歳)

後三條天皇は、後朱雀天皇の第二皇子。母は三條天皇の第三皇女、禎子内親王。

学を好み、才能卓抜、資性剛健、母が藤原氏出ではないため、全盛をきわめる藤原氏の摂関政治を終わらせ、天皇親政をされた。

秋の野に旅寝せよとや夕霧の行くべきかたをたちへだつらむ

(続古今集)

住吉の神はあはれとおもふらむむなしき舟をさしてきたれば

(後拾遺集)

思ひ出でば同じ空とは月を見よほどは雲居にめぐりあふまで

(新古今集)

「歴代天皇御製歌」(三十八)

貫名海屋資料館

「白河天皇」第七十二代・一〇七一年(二十歳)―一〇八六年(三十四歳)

白河天皇は、後三條天皇の第一皇子。三十四歳で讓位されたあとは、「白河上皇」として院政を、院政のはじまり。在位中、延暦寺と園城寺の僧徒の戦い、延暦寺と熊野の僧徒の強訴もあり。

『平家物語』卷一、「加茂の水、双六の賽山法師是ぞわが心になわぬもの」と嘆かれたという。

「加茂川…水害のこと」「双六の賽…サイコロのこと」「山法師…強訴を繰り返した比叡山延暦寺の僧兵のこと」

庭の面は月もらぬまでなりにけりこずゑに夏のかげ繁りつゝ、

新古今集 二四九

咲きにほふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらにしらるる

新古今集 一九〇六

熊野の神の深いお心とお恵みを…知らるることよ。

挽歌

夏目勝弘

○過ぎてこしを失ひ生きゐて今のいま柩の妻に涙す翁

この翁との係わりは七十年余、多くの若者は兵として召され帰れなかつた者も多い。

広い田畑を持つ農家では、人手が無くなり大変であつた。その農家が隣りで次男がこの翁である。

小学生であつた私は、白いご飯、卵等の食べ物がたべられる、そのために手伝うようになり、学校から帰れば畑に田に、休日などは一日中手伝つた。

葬儀の参列者のなかにいて、七十年間と振り返つていた。

トイレ出口で翁に会い、声をかけると、「あんただれだん」と言う、もうこんなに進んでしまつたかと、それ以上話さず戻る。

焼香もすみ、最後のお別れと花を柩に入れる、翁も花を手には花を入れて、少し間があり、突然涙を流し柩の縁を両手で、しっかりと掴み放そうとはしない。

正氣に戻つたのだろうか、家族に強いられ席に戻された。

葬儀場えは無理だと家に帰えそうとしたが火葬場に行くと言ひ出し連れに行く。

火葬の準備をすませ、お骨となるまで待合室に、そこで親族や子供らと話をしているうちに、笑顔となり、私も認識できたのか、家族のこと頼むと言ひつた。

集骨の用意が出来たので一階に下り、集骨をするだんとなり翁に箸を渡すも、振いのけ素手で掴もうとする、慌てた家族が引き戻すも、振り払うの止めて集骨を終えた。

帰りの駐車場でバスに乗らず、ここに残ると言う五分余り

諭も乗らないので、皆バスに乗ってしまったの見て、ゆつくりとバスに近づいてきた。

三月七日の法要がすんだときには、元の悪い状態に戻ってしまったていた。

萬葉集にも挽歌が多く収められている。また短歌を作る者であれば、だれもが一首ぐらい作つたことがあるであらう。

アラragiの先人たちの歌集にも多くを見る、特に多いのは土屋文明の歌集である。故人への思い、愛いが強いためであらう。

佐千夫先生五十回忌、島木赤彦五十年忌等その他の故人にも節目には歌にしている。

これからも挽歌を作ることもあるであらうと思い、文明の挽歌を書き出してみた。

左千夫先生を思ふ（放水路）

○前こごみにて足早の姿おもふさへかすかな二十年前は

悼平福百穂画伯（放水路）

○山の上の月をあはれみ時経ぬに君をふりの宵のさやけさ

石田百合子をかなしむ（自流泉）

○病み病みて紅させる汝が頬にゑくぼは清し処女子のごと

追悼斎藤茂吉（青南集）

○死後のことなど語り合ひたる記憶なく漢々として相さかりゆく

原町弔問、附川戸村（続青南集）

○翁一人亡きをかなしみ訪ひ来ればなほ健やかに集る翁たち

伊藤つゆ刀自をかなしむ 石原純令妹（続青南集）

○語らへば語らふ誰も和みにきもの静かさば兄君に似て

長崎太郎君長逝（続々青南集）

○留級の吾等に来りし優等生君に思ひきや生を終ふる交り

「氷魚」のことから (174) 岡本八千代

空木^{ウツギ}の花の季すぎで、夏も近づいてきた。今、私の六畳の一間には「ノボさん」(子規)の本ばかり広げている。

「司馬遼太郎と詩歌句を歩く」(新海均著潮出版社)に「一文字へのこだわりこそ俳句の命だからだろう、一字ちがいで全く違う句になってしまう。」(P118)とあった。短歌の場合もそれと同じことが言えるのではないかと私は思った。子規はいう、「歌は感情を述べるものである。リクツをのべるものではない」と。歌を詠もうとすることは、その人の感性を育ててゆくことになろうか。

近ごろは、文語的と国語的と交わったり、その過度期にあるためか、作者は何を詠もうとしているのか私にはわからない歌が多い。なお、お勉強をして、自分の感性を強めたいと思っている。――。

今回はまた逆のほって、子規の少年(十二歳ごろ)の回覧雑誌のことにふれてみたい。

子規は文学好きの友人と語りあって、「五友雑誌」を手づくりにして出しつづけていた。雑誌の体裁をつくつて、「社長、編集長、書記長」などとも記していた。当時、十二、十三、十四、十五、十六歳の年令の集まりで作っていた。しかも、その雑誌風なものを編集して、カットも挿絵も入れて、発行所もしるして、「投書をまつ」と書いたりして、ミニチュア文壇の気どりで楽しんでたようだ。

内容は、漢詩文、雑文、戯文、作文、政治的論文まで募集

したりしていた。田辺聖子「少年の回覧雑誌」を参考に)

子規の少年時代の筆まめの姿が目につかぶようだが、当時の少年たちの文学好きの心情のあらわれかもしれない。現在の少年たちはどうであろうか? スマホなどの会話、その他機器文明によって、自らが書くということが少なくなっているようだ。自分の考える力弱まってゆくような気がして私は寂しい。

因に、子規全集第八巻の漢詩・新体詩篇より明治十三年頃の漢詩稿(書き下し文)拾う。

7・風船

風裡從横 碧空に上る

多年の苦慮 天工を奪ふ

須^{もと}ひず鶴背仙人の術

千水万山 指点の中

明治十四年の作、

9・初夏郊行

渺々たる晴雲 万頃の田

稼翁 背を曝して江辺に立つ

一声の杜宇に 花 零落し

唯 新荷の水より出でて円なる有り

等々。この時代の子規は、春雲と号していた。彼の庭に一株の老桜があつて、庭の半ばを蔽うほどであつたので因んだといわれている。少年の頃から、文筆に親しみ楽しんでたようですが伺える気がする。

ことのはスケッチ (439) 今泉由利

『天田愚庵』⑥ 年譜

- △明治二十六年（一八九三年）愚庵 四十歳
- 二月、姫路に至り、書写山に登る。
- 春、清水港の友人中井俊之助と伊豆下田より七嶋に航せんとして果さず、帰庵。
- 六月十二日、清水次郎長没、行年七十四歳。東京に子規を見舞い、北海道旅行中であつた。
- 清水港に立ち寄り、次郎長の追善供養を行う。
- 九月二十日、西国巡礼に出発。三十三ヶ所の霊場を巡る。
- 「新聞日本」が広く世に伝えた。
- 十月十九日。天気良し、夜明けて堂を出、鐘楼より谷を隔て滝を望めば、自らすすがし。
- 底つ巖根つき貫きて普陀落や那落も摧け那智の大滝
- 愚庵、高野山奥の院で見た芭蕉の句、
父母のしきしに恋し雉の声
愚庵の和歌
- 我袖も濡れこそまされたらちねを恋い渡す子がかいの雫に
真幸くて在せる父母御仏の恵みの末にあわざらめやも
- 燈照無明路（ともしびは照す無用の路）
- 雲薰不断香（雲は薫す不断の香）
- 高僧長入定（高僧長に入定したまう）
- 泉石有靈光（泉石靈光有り）
- 十二月二十一日、帰庵。
- △明治二十七年（一八九四年）愚庵四十一歳。
- 二月・三月上京し、江政敏や羯南、中村真金宅に滞在する。
- 「巡礼日記」を日本新聞社で印刷刊行。
- 六月、再上京、江敏宅に滞在する。
- 七月、日清戦争はじまる。
- 九月、腎臓病にかかり、江家の看護を受ける。
- 十二月痼疾再発。一時重体。須磨に療養。
- △明治二十八年（一八九五年）愚庵四十二歳。
- 須磨で療養三ヶ月、ようやく回復、帰庵。
- 七月下旬より夏中、但馬国城崎温泉で湯治。九月下旬帰庵。
- 中秋、漢学者で詩人の長尾雨山と琵琶湖竹生島に明月を賞し、越の桂湖村と大和に遊ぶ。
- 冬、大阪辺りを旅し、十二月中旬、帰庵。
- 恩師落合直亮没。行年六十八歳。
- 夏目漱石、松山中学校に赴任。
- △明治二十九年（一八九六年）愚庵 四十三歳。
- 一月上京し子規の病床を訪う。
- 二月 熱海に遊ぶ。
- 三月、種竹山人、竹隱居士と月ヶ瀬にて観梅。
- 庵室に、二階に三畳一室を増築し、二休楼と称す。
- 心おきなく俳句や短歌、お茶の話をするため、庭に石など敷き、十二勝と名付けた。
- 白雲の夕居る山のその巖の苔むすしたに我は棲まむぞ
- 逝く年は惜しけくもなし春待ちて花をし見まし老ぬともよし
- 愛子我巡り逢へりと父母のその手を執れば夢はさめにき
- せこやこひし勢子や恋しとおもふより夢に入りしかあはれ
我妹子
- 五月、鳴門観瀾。帰途神所で痼疾再発、咯血。
- 友人桜井一久の介抱を受け快復。帰庵、静養。
- 十二月八日、寒川鼠骨来訪。

△明治三十年（一八九七年）愚庵 四十四歳。
○三月初め、上京。

○四月、帰庵。

○七月、奈良に遊ぶ。

○初夏、越の桂湖村来訪。

○十月上旬まで滞在。愚庵に和歌の指導を行なう。

○湖村帰京の折、子規への土産に柿をもたせる。

子規

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

つりもねの蒂のところが渋かりき

みほとけにそなえし柿のあまりつらん我にたびし十あまり

いつつ

籠にもりて柿おくり来ぬふるさとの高尾の山は紅葉そめけん

おろからふ庵のあるしかあれにたひし柿のうまさのわすれ

えなくに

歌をそしり人をのしる文を見れば猶ながらへて世にありと思へ

折にふれて思いそいずる君が庵の竹安けきか釜恙なきか

愚庵

命全く長く垂らさまく天地に祈れもろもろ魔詞般若波羅密

雪の下に竹は伏すとも冬籠り春たたむ日は起きたたたむ日そ

俳誌「ホトトギス」松山で創刊。

△明治三十一年（一八九八年）愚庵 四十五歳。

○宇治に遊ぶも健康すぐれず。

○三月二十二日、福本日南来訪。

○秋、羯南、桂湖村来遊。寒月鼠骨来合わす。

○師滴水の病状悪化（肋膜炎から肺炎合併症）

延寿祈禱の法会に列す。

子規、最初の歌会を子規庵で開く。

更衣出べくとして我約ありし

鼓けどもく水鶏許されず

碧梧桐
虚子

竹林に昼の月見る涼しさよ
涼風や愚庵の門は破れたり

把栗
子規

我庵の苔の細道誰待つと藁は落ちし玉敷くか如

愚庵

長い藁円い藁も熟しけり

熟したる藁の木に徑を為す

鉄鉢に藁盛りたる僧奇なり

行脚より帰れば藁熟したり

把栗
子規

いさ我もいでうたはむ此夜らは月人男来て舞ふらむそ

愚庵

物干に月一痕の夜半かな

憤鼻禪を干す物干の月見かな

松はしぐれ月山角に出でんとす

嘯けば月あらはるる山の上

把栗
子規

斧の柄の朽ちにしことの談りこと継ぐ人は語り継ぐへし

愚庵

寒夜一棋石盤をうって鳴る

石の上に春帝の駕の朽ちており

閑古鳥僧石に詩を題し去る

野狐死して尾花枯れたり石一つ

把栗
子規

愚庵十二勝を唱和する。

把栗
子規

愚庵禪師御もと

御仏に供へあまりの柿十五

○「ホトトギス」東京で発刊。

子規

編集室だより【二〇一五年 五月】

☆三河アララギ賞 安藤和代様

案じいし夫の診察異常なし自動ドアさえ軽やかにあく

難しい事々に力強く対処してゆかれるご様子読者の心に「やさしさ」を残します。

○ペルリン独日協会・事務局長のカトリン・スザンネ・シュミット氏より、シャルロットテンブルグ宮殿で行われる展覧会に、今泉由利の短歌の参加をお待ちしますと推薦状をいただきました。

○蒲郡産のデコポンを見付けた。毎日夢中になっていたいている。

○NY発信、世界最大級の、エレクトロニック・ミュージック、ダンス：フェスティバル幕帳ビーチに初上陸。玉由が関わった超イベントに、ひたすらびっくりにしているばかり。

○洗足池公園吟行。池の水で足を洗われた日蓮上人、日米修好通商条約のため咸臨丸に乗って渡米の勝海舟。江戸城無血開城を成し遂げた西郷隆盛：洗足池の若葉の中に、しみじみと偲ぶのでした。

大岡山駅前の精養軒に於て、亡くなられてしまった佐藤喜仙主宰を偲ぶ会。会食。句会。喜仙師を継いでゆくことを思う。

○真鶴半島へスケッチに。海辺で育ったから海にしていると自分になれている気がする。この地で絵を描いておられた中川

一政画伯の美術館を訪ねた。沢山のことを教えて下さいました。

○画は学校へ行っても得ることはありませんよ。自身が経験しなければだめです。

○写生で描いた画は、欠点があってもタッチに生氣がある。

○写真とは、見たままを描くことではなく思ったままを描くことだ。

○腹に力が入っていますか、手先で描かぬこと。

○すて去りすて去りして、純粹になってゆくののだ。

○画とは止むに止まれぬ気持で描いて、それだけでいい。

○一人部屋に籠り、調べものをしてることが多い。「声を出さなくては」と、詩吟を思いたつと、たちまち先生と仲間と詩と：素晴らしいこととなる。時に、時習館六回生の「会長」が出稽古に来て下さり、三河アララギより私の短歌や俳句を吟じて下さいます。夢のようです。

○東京王子本町・どうも孤独だな。なるべくこの辺にも馴染まなくては：と思う矢先、駒込名主屋敷。染井の植木屋、種屋。鷹匠屋敷と。浅間神社、吉祥寺、二宮尊徳翁の墓碑、「一富士、二鷹、三なすび」へのウォーキングに誘って下さった友人達。

○常日頃気になっていた玉川上水・分水綱のシンポジウムへ。東京の東西を貫く水と緑の大動脈。多摩川の水源地・羽村堰・四谷大木戸・江戸城・下町へ至る。

武蔵野台地の分水嶺から、南北方面への上水、用水供給による台地の新田開発、崖線の湧水、低地の河川への養水、緑の生態系の維持。

奥多摩から自然流下で約7時間で導水可能と。

和菓子街道（105）

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

姫街道(1)

今号から、浜名湖北岸をゆく鄙の道「姫街道」の探訪を始めたい。

子供の頃、母方の祖母の故郷浜松に車で行く時は、浜名湖が見える辺りを通るとわくわくしたものだが、浜名湖は古くは海とつながっていて、旅人は今切の渡しから船で渡らなければならなかった。「今切」という言葉が縁起が悪いといって、浜名湖を渡ることを嫌った女性たちは、浜名湖北岸を通る道を選んだのだそう。そんなことから、浜名湖手前で東海道と分岐し、浜名湖北岸を通って御油宿で再び東海道と合流する脇往還は姫街道と呼ばれるようになったのだとか。実際、姫街道を舞台にした女性の物語もいくつか伝えられている。

また、古道の意の「ひね道」が転じ、ひめ道、姫街道となったとの説もある。〈遠江引佐細江のみをつくし我れを頼めてあさましものを〉



石畳のある鄙の道、姫街道。

姫街道沿いにはこうした万葉歌も多く残る。

今は亡き祖母との思い出と、女性たちの物語、万葉歌に誘われて、姫街道を歩いてみることにした。

お知らせ

▽八月号の原稿は、七月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月の原稿に同封して下さい。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

第三十三回 子規顕彰全国短歌大会

応募要領 雑詠一首一組(未発表作品に限る)何組でも可。

規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページからダウンロードできます。

郵便番号・住所・氏名・雅号・電話番号を楷書で明記し、氏名・雅号にはふりがなを付けて下さい。

応募料 一、五〇〇円(一首一組)郵便小為替か現金書留
締切 平成二十七年七月三十一日(金)必着
〒七九〇・〇八五七 松山市道後公園一三〇

応募先 松山市立子規記念博物館 子規顕彰全国短歌大会係
〒〇八九・九三一、五五六六
(ホームページ) <http://skibaku.leap.co.jp>

選者 秋葉四郎・永田和宏・坂井修一・倉林美千子・尾形啓子
(後援者)

賞と発表 愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞
選者賞・特選三首・入選十五首(計九十首)

後援賞・現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞
短歌研究社賞・角川『短歌』賞・現代短歌社賞

入賞歌集 応募者全員に送付いたします。(十二月下旬予定)
大会日時 平成二十七年十月二十五日(日)午前十時より

場所 松山市立子規記念博物館 四階講堂
記念講演 講師/坂井修一氏(現代歌人協会理事・かりん編集委員)

演題/「世代をつぐ短歌」
主催 松山市教育委員会

後援 文化庁 愛媛県 現代歌人協会 日本歌人クラブ 松山歌人会
短歌研究社 株式会社KADOKAWA『短歌』編集部

現代短歌社 朝日新聞社 読売新聞社 毎日新聞社
愛媛新聞社 NHK松山放送局 南海放送 テレビ愛媛

あいテレビ 愛媛朝日テレビ FM愛媛 愛媛CATV

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年六月二十五日印刷 第六十二巻 第七号
平成二十七年七月一日発行 定価 六百元

編集部 岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子・森岡 陽子

発行人 今泉 由利

発行所 三河アララギ会

〒一四一〇〇三二 東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一・二〇六五

振替口座 〇〇八三〇・一六・五六三九

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所 株式会社 桜 創 美